

第9回千葉大学英語教育学会&

第14回ちばてっく (Chiba Teaching English to Children) 会報

本学会は英語教育をみんなで考え、意見交換を行い、研鑽していく会です。

当日は大変寒い中、非常に多くの方が足を運んでくださいました。

(1) 『語形成と文法の接点』

初めに、千葉大学教育学部の神谷先生より英語の語形成と文法の接点というテーマでお話ししていただきました。

【語形成の種類】

語形成には、二つの語があわさってできる複合語と派生接辞や屈折接辞の付加による接辞付加があります。派生接辞は語に付加されることによって、**possible→impossible** や **happy→unhappy**, **popular→popularity** のようにその語の品詞や意味を変えます。また、派生接辞は元の語の主強勢の位置を変えたり、発音に影響を及ぼしたり、予測不可能な新たな意味を付け加えたりするⅠ類と元の語の主強勢の位置や発音に影響を及ぼさず、新たな意味を付加することもないⅡ類に分類されます。

千葉大学教育学部 神谷 昇先生



【従属接続詞の that】

従属接続詞の **that** の省略の可否は、その直前の語に依存します。直前の語にⅠ類の接辞が付加されている場合の **that** は省略できず、一方、Ⅱ類の接辞が付加されている場合は省略できます。これによると “It is possible that~.” のような文における従属接続詞の **that** は省略可能となります。

【V-able 形容詞の性質】

ここでは接辞-able に注目します。接辞-able には「Ⅰ類」と「Ⅱ類」の両方があり、Ⅰ類では元の動詞から「前置詞＋名詞」の出現が引き継がれ、意味は「変化や結果状態」におかれます。一方でⅡ類では元の動詞からは「前置詞＋名詞」の出現は引き継がれず、意味は「行為」におかれます。例えば **comparable** はⅠ類では “COMparable = equivalent”、

Ⅱ類では“comPARable = capable of being compared”となります。

【結論】

従属接続詞 that の省略の可否、V-able 形容詞で元の動詞の「前置詞＋名詞」が出現できるかどうかは、動詞などに付加している接辞の性質によります。また、これらを理解するためには、文法ばかりでなく「単語の形成」や「発音」にも注意する必要があります。

【質疑応答】

どのようにして従属接続詞 that の省略を分析したかに関しては、音として聞こえるかどうかではなくツリーを描いて分析したとのこと、-able が二つに分かれる理由が歴史的背景から来ているのかに関しては、具体的にはわからないとのことのお答えをいただきました。

(2)『小学校における効果的な英語学習について』

English Pier 主宰 菊池 優子先生

【小学校段階における英語の絵本と歌の利用について】

千葉県で英語の塾をされている菊池先生に、小学校段階における効果的な英語学習について講演をしていただきました。

菊池先生は子どもの英語は楽しくなくてはならないといった観点から、主に小学校英語教育での絵本と歌の活用を推薦されていました。特に、歌やチャンツでは体を使うので集中していない子どもに効果的で、

子ども達にとっては繰り返す事のできる歌が定着にも繋がるとおっしゃっていました。また、歌は後になって思い出す事もあり、子どもの長期記憶にもなりえ、子ども達の心に残るという点でも、歌は効果的であるという事でした。

さらに、絵本に関しても生徒に発達段階において重要な英語学習のツールであるとも菊池先生はおっしゃっていました。絵本の活用により、見ている物があると子ども達は集中できるというメリットがあります。

絵本の具体的な活用方法として菊池先生は、いきなり和訳などをするのではなく、英語で書かれた絵本を最初に簡単に内容を説明し、次に、英語で絵本をもとに子ども達とやりとりをしながら話をすすめ、子ども達との対話の中から話をひろげるという過程を経て、主に英語と絵を結びつけ子どもと先生が会話を行いながら学習していくという方法を紹介されました。時々、次に何が起きそうかなどの会話をするためにも題材は生徒が想像しやすい物として、生活との結びつきがある物が特に適していると考えられます。さらに、先生との対話が終われば、話の好き嫌いやその理由、登場人物などを整理できるように紙に



書かせ、その後に話の続きの予想、裏に絵を書いてみるなどの行為を通して子どもの心に残るような教材の活用を紹介して下さいました。

【CLILの活用法】

また、授業をよりよくするための方法として「CLIL」という内容言語統合型学習を教えてくださいました。内容言語統合型学習とは、第1言語以外の言葉を用いながらも、教科の学習を行うことです。例えば、6+5の計算やJPNというカードを用いて、何の略かを答えるといった授業や、国旗の絵を見て何色があるかを子ども達が答える授業、サッカー日本代表の選手の身長などを、選手名鑑を見て答えてみるといった英語での授業実践例を見せてくださいました。そして、CLILを学ぶきっかけとなった事は、低学年の子どもは英語に対して楽しそうにしているのにも関わらず、高学年になると物足りなさを感じているのではないかという子ども視点での発想からだったそうです。

最後に、絵本やCLILの使用の注意点として、絵本では教員自身がわくわくするような題材を選ぶ必要があり、CLILでは深入りしすぎてしまうので気を付けた方が良いといった実践者へのアドバイスも頂きました。貴重なお時間を本当にありがとうございました。

(3)『生徒の学びのプロセスに寄り添った指導の工夫』

宇都宮大学教育学部附属中学校 田村 岳充先生

田村先生にはワークショップ形式で、「生徒の学びのプロセスに寄り添った英語の指導のあり方」についてお話をいただきました。



【ゴールの設定の大切さ】

まず、授業中に生徒がどのように感じているのかを考える必要性についてお話を伺いました。学校行事において、生徒は1つのゴールに向かい、非常にいきいきとした姿を見させてくれます。その姿を英語の授業においても発揮させることができるように、ゴールを逆算しながら生徒にはっきり示してあげることが大切であるとおっしゃっていました。

【知らない言語を学ぶことの難しさ～学習者体験を通して～】

続いて、学習者の気持ちを忘れないという視点から、田村先生が会場全体を相手に言語指導の実践をしてくださいました。今回は多くの参加者にとって初めて耳にするタガログ語を取り扱いました。その指導においては、音声のみのリスニングに始まり、視覚教材や

文字による補助、音読活動、穴埋めによるライティング活動とスモール・ステップが意識されている展開でした。実際に学習者体験をすることを通して、教員となってから忘れがちな「知らない言語を学ぶことの難しさ」や「書くことのステップの難しさ」等といった学習者の目線を再認識する機会を与えてくださいました。

【第二言語習得と外国語指導】

次に、第二言語習得についてお話をいただきました。第二言語習得においてはインプット仮説やアウトプット仮説等が提唱されていますが、これに関連して田村先生は「言語は意味のあるコミュニケーションを通して身につく」とおっしゃっていました。そして、「まずやってみて、失敗して、また挑戦して」というプロセスを繰り返す言語習得を部活動指導と重ね合わせながらお話をなさっていました。

【学習者を意識した英語の授業づくり】

最後に、こうした視点を踏まえた上で英語の授業はどのようにあるべきかについてお話をいただきました。田村先生は英語の授業を作る上で大切なこととして、第二言語習得の流れと照らし合わせることやインプットを十分に与えることを指摘なさっていました。そして、その根底には「学習者の目線を常に意識する」という考え方があるとのことでした。

今回の田村先生のご発表は私たちに「学習者の目線を考え、それに寄り添うことの大切さ」について改めて見つめ直すきっかけを与えてくださいました。教える立場にいと、つい見えなくなってしまうがちな「学習者の目線」にこそたくさんの新たな気づきがあるとのことでした。

(4)『第二言語習得の目的、英語教育学の研究成果に基づく学習者の誤りへの対応法』

静岡大学 白畑 知彦先生

最後に、静岡大学の白畑知彦先生より、「第二言語習得の目的、英語教育学の研究成果に基づく学習者の誤りへの対応」というテーマでお話をいただきました。



【第二言語習得研究の2つの方向性】

そもそも第二言語習得研究には2つの方向性があるとされます。1つは、言語習得のメカニズムを解明することです。2つ目は、外国語教育への示唆であり、教えることへの提案だとされます。どちらにせよ、経験や勘に頼らない、実証的調査が共通項として大切にされるべきということを前提として強調されました。

第二言語習得のメカニズム解明に関して、いくつか鍵となる点があるとされます。母語転移、発達段階、異なる学習者に共通する体系性、個人差、不完全に終わる習得などを詳細に見ていく必要があり、これらを踏まえて「なぜそうなのか？」を解明していくことが第二言語習得研究の目的であります。ここから様々な言語理論が登場します。

生成文法理論に基づく第二言語習得研究においては、普遍文法と文法のモジュール性を前提としており、ミニマリストプログラムでは、現在2つの動向があります。1つ目は、文法のモジュール性に注目し、その文法モジュール間での言語項目の習得研究という方向です。もう1つは、習得の「容易さ」「困難さ」の対比を、インターフェイスの問題としてとらえることであり、どのインターフェイスの習得が困難であるかを考察するようになりました。

以上が本講演第一の目的、第二言語習得研究と外国語教育学研究の最新の流れの紹介でした。

本講演の第二目的、外国語教育への示唆についてです。ただしこれはあくまでも「なぜそうなるのか？」に答えるものではないということが挙げられました。訂正フィードバックを中心に、教室での教授に対してお話がありました。

【訂正フィードバック】

これまでの訂正フィードバックの先行研究には、いくつかの問題点があると白畑先生は指摘されました。学習者の母語特性を無視しているものや、調査項目の偏り、長期的な効果の検証の欠如などがあり、それらを踏まえて先生がされた研究の成果から分かってきたことが以下に示す通りです。

まず、多くの場合、教師の明示的な指導は短期的には効果があるとされますが、長期的には有効に明示的指導が働く場合とそうでない場合があるということです。具体的には、文法形態素など文法的な機能を伝えることを主とする項目は長期的な効果があまり明示的指導には期待できず、接続詞の使用方法などは明示的指導による長期的な効果が期待できるということです。明示的指導による長期的な効果の低い、習得の困難な項目は、その理由として母語の転移ではなく、言語の規則の複雑さがあるようです。一方、比較級などの、概念的難易度の低い形式的な学習が中心となる項目については、反復練習が効果的に習得に働くとされます。また、誤り訂正の効果については、そもそも誤りを学習者が犯さないような項目があることは別として（主格と目的格など）、概して、一般認知能力と大きく関係があるようです。さらには、学習者の習熟度が上がれば、誤り訂正をしなくとも自然と誤りが減っていきませんが、それでもすべての誤りがなくなるかどうかまでは未だ分かっていません。

【研究成果】

上記の研究結果を導くものとして、先生自身の研究を3つ、ご紹介くださいました。1つ目は、「ある特定の文法形態素の難易度順を明示的指導によって変更できるのか。もしできるのであれば、『普遍的な習得順序』は存在しないことになる。」ということの解明を目的として行われたものです。

文法形態素の長期的な定着に、明示的指導はあまり効果がないことが分かりました。2つ目に示された研究からも、明示的指導と修正フィードバックは、文法形態素の習得において短期的な効果は見られるが、長期的な正用率の上昇は期待できず、また、明示的指導と修正フィードバックは文法形態素の習得順序を変えることはできないということが分かりました。3つ目に紹介された研究結果からは、概念的には理解しやすい「比較表現」は、反復して形式を覚えることで習熟度が高まる文法項目としてとらえられる、ということが分かりました。

本講演のまとめとして、第二言語習得研究について、これは「教師としての心構え」、そして「誤り訂正」がどのように役立つか、などの見地が得られることから、その意義が見いだせるだろうという話が述べられました。訂正フィードバックに関しては、明示的指導は効果に差があり、文法的意味を伝える文法形態素の習得には明示的指導の効果が低い傾向があるとのことでした。しかしながら当然、学習者の習熟度、認知能力とも大きく関連しているということです。

【小学校英語教科化】

最後に、本講演では特別に、白畑先生のお考えになる小学校英語の教科化について、お話がありました。これからは、小学校5・6年生は今の外国語活動とは根本的に異なる取り組みになり、英語力を高めるために発音・語彙・文法を指導しなければならないとのことでした。これらの指導なしに語学学習は成り立たないとお考えからです。そうして、今までよりもじっくりと時間をかけて英語教育に取り組み、中学3年生の時点での英語力の底上げにつなげるべきだとのことでした。また、中学校3年生の1年間をそれまでの学習内容の総復習とし、しっかりとした定着を図ってから高校に送ることで、成績不振から来る「英語嫌い」を減らせるのではないかとのお話もいただきました。継続的な英語の使用、反復を重視した指導を取り入れ、日本人の英語力の底上げを図るべき、と締めくくられました。

【質疑応答】

Q:規則過去形と不規則過去形の難易度の違いについて、なぜ規則過去形の方が簡単ではないのでしょうか？

A:基本的な不規則過去形は、決まった表現のため、むしろ間違えません。規則過去形は、

規則は簡単ですが、似ているが故に（現在形と）間違えやすいのではないかと思います。そして、これは母語においてもそうであり、不規則過去形の方が規則過去形よりも目立つから、間違えない。しかしながら教えるときには、-ed を付けるのを教えるのが教えやすいのであって、文法の難易度と、教える順序は必ずしも一致する訳ではないのです。

閉会後の懇親会にて活発な意見交換が行われました。

千葉大学英語教育学会・ちばてっく(JES 千葉支部)
〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33
千葉大学教育学部英語科
E-mail: chibauni.eigo@gmail.com
TEL: 043-290-2678 (本田勝久研究室)

